

「教育思想史学会レポート」

平成 19 年 2 月 28 日

武術操身法・遊武会主宰 石田泰史

<平成 18 年 9 月 18 日に行った教育思想史学会でのワークショップについてのレポート>

今回「教育思想史学会」の学会発表の場においてワークショップを行う機会を頂き、少し前に記した「型を読む」と題した小論文をベースに進行してみようと、具体的な流れを作っていたが、その過程で一つ大きな問題があることに気付かされた。

小論文の要旨は、武術における「型（かた）」を、身体運用の合理性を求める為の暗号や情報、制約とといったものであると捉え、一方で表面的に見える動きだけを認識したものを「形（かたち）」として区別し、その違いを明らかにしようとするものであった。その内容に準じてワークショップの内容を練り、自ら構築した幾つかの型を取り上げ、当日の参加者に体験してもらうことで、型の意義を体感してもらうと目論んでいたのだが、実際にその切り口で自らの型を見直す程に、その大部分が型に至る過程の「術」をそのまま一定の動きの中で表現したものであるということが浮き彫りになってきたのである。ここで言う術とは、高度に合理化された非日常的な身体運用に起因する見えない変化や、相手を崩す、投げるといった具体的な作用を指す。

居合術や杖術のような武器を用いた独演の型が中心となっているものであれば、内包された術理の再現性に係わらず、表面的には同じ動きを型として伝えることは可能である。しかし相手を伴う体術においては、場面毎に条件が変わる為、いくら手順を定めていようが、実際に効力の有無が目に見えるだけに、へたをすれば即物的な動きに陥りかねない。これを型としてひと括りに表現してよいものだろうかということが、新たな課題として浮かび上がってきたわけである。

試行錯誤の後、当日現場に臨んだ段階で達した結論は「動きそのものを型として捉えるのではなく、身体運用の合理化、記号化といった考え方そのものを広義の型として認識すれば良い」ということであった。同時に、型について思索すること自体が型の意義を深めるということであろうと考えるに至ったのである。

さて、実際のワークショップについては、武術についての概略（持論）を一通り口頭で説明した後、まず居合術の型を題材に、膝の緩みによる上半身下半身の感覚的分離や、動かさないことを一種の変化として認識することなどを紹介した。

「動かさないという変化」は当会の武術技法を認識してもらう上で不可欠な要素の一つである。ここに取り上げた例で説明すると、左足を後方に開き四股立ちのような姿勢になる過程で、右足は元の位置に留まっているが、表面的に動きのある左足と動きのない右足の相対的な関係を見ることで、空間的な移動の有無に係わらず、左右何れも変化しているものと認識する、ということである。そこには動きの基準を常時能動的に確定するという意識下の作業が求められ、それはやがて複数の身体変化を同時に等しく意識して処理することにつながっていく。

続いて体術として「鍵抜き」という手解き（相手に持たれた手を無理なく外す）の技法を紹介し、参加者同士で実践してもらうことにした。力強く握られている程、普通感覚では手元を捻りながら外したくなるものだが、ここではこの捻りの動きを、腕の骨を軸とした横回転の変化と、持たれた部分を支点とした指先から前腕部までの縦回転の変化に分解する。しかもそれぞれを明確な時間差を付けて行うのである。この二つの変化を効率よくつなげる為に、下半身や体軸の動きも並行処理する必要がある。一つの動きを二つ以上に分けて行うことで、一見すると時間がかかる分だけ相手に反応され易くなるようにも思えるが、実際には身体の変化と相手に与える作用とにズレが生じる為、力のぶつかりを感じることなく手を外すことができる。ここでは相手の手から逃れるという一つの目的に対し、自分の一連の

動きを極力細分化して記号化し、それぞれの要素が何に対して作用しているのかということを明確に認識した上で、一つの動きとして再構築することを学ぼうというのが狙いである。

次にもう一つ「居捕り引き崩し」という体術を行った。これは対座した相手に両手を上から押さえつけられた状態から、力のぶつかりを回避して、相手を崩していくというものだ。先程の「動かさないという変化」を発展させたもので、常に変化の主体を接点以外の部分に置くというのが趣旨である。何人かの方に私の技を受けて頂いたが、手順と理屈を説明した上で行っても、同じように掛かる。これは術を成り立たせる理論が一連の動きの中に漏れなく含まれている為である。相手の体格や距離のとり方によって見た目の姿勢などは幾らか変わっているはずだが、作用としては同質のものとなっているということであろう。まさに型として動くことの意義がここにある。

武術においては、相手に「伝えたいこと」と「伝えたくないこと」の二つで動きが構成されている。前者は「作用」であり後者は「変化」である。相手に何らかの作用を及ぼす為の変化を自ら行うわけだが、最初に変化の情報が伝わると、当然相手はたちまち対応し、それを防ごうとする。作用が具現化するまでに、どこまで変化を隠し通せるかということの方法論が、型の中に納められているのである。相手をどうするかではなく、自分がどうするかということだけを学ぶ手段が型であり、相手に及ぼす作用は結果の一つに過ぎない。

ところで、体術など相手と対になって行う稽古においては、一つだけ留意しなければならないことがある。それは「感応」の排除である。特定の結果を生むことを目的とした型を反復して行うにつれ、技を掛ける側と受ける側の動きが無意識のうちにシステム化され、実際に作用の有効性がない場合でも同じ結果を導いてしまうことがある。これが感応とよばれるものである。まさに動きのプラシーボ効果と言ふべきものだ。これに陥ると、本人はわざと掛かっているつもりがないので、互いに現実的な有効性を検証できない状態になってしまう。ここに体術を型として行うことの危険性を見出すことができる為、先述の通り居合術や杖術と同じ感覚で捉えられなくなるのである。型稽古においては、感応や予定調和を排する意識を常に持ち続けることが不可欠であると言えよう。

さて、ここでこれまでの流れを踏まえて、もう一度型の意義について考えてみたい。型が理論を体現したものであるということは、いくつかの技法を紹介する中で伝わったのではないかと思う。ここで注意しなければならないことは、型をマニュアルの如く捉えてしまうことである。一つの結果を求める為のマニュアルとして型を認識してしまうと、それこそ稽古が予定調和に陥るはめになる。

私は古人が型に込めて残そうとしたのは、技術ではなく感性ではないかと考えている。実際にやってみるとお分かり頂けるかと思うが、武術の技法は各人の感性によってその表現方法が大きく変わり、また同じ質の動きをしていても、人によってそれを説明する言葉が全く違ったものになる。いくら理論で納得していても、実際に有効な技術として型を用いるのに、ある種の勘が必要になるということは、武術に限らず言えることであろう。

先程「相手をどうするかではなく、自分がどうするか」と述べたが、一連の動作の中で伝えるべきことと伝えざるべきことを記号的に認識させてくれるのが型であり、そこには客観性が主として求められる。しかし実際に働いているのは本人の感性であり勘である。

元々個人の感性によって術が生まれ、そこに客観性を持ち込んでその感性や感覚といったものを伝承可能な質に置き換えようとしたのが型であると考えれば、その意義がはっきりと見えてくるのではないだろうか。型を通じて先人の感性を記号的に取り込み、それに則って自らの感性を技や術として表現するというのが、型稽古の本意であると思えるのだ。

武術という極限状態を前提とした世界であればこそ、個人の意識から分離して技法を記号化する必要があったのであろう。より無駄を排した効率の良い動きを実現するということは、命を守ることに直結するが、ここに人間の人間らしさが良く現れているように思える。

野生の動物は本能に基づいて動き、感覚の鋭い者だけが生き残って行く。小さな猫でも本気になれば、その身体能力は人間の敵うところではないだろう。自然の中においては人間本来の身体能力など取るに足らないものである。その代わりに与えられたのが考える力ということだ。

動物の素早く力強い動きは本能的身体性によるものである。その人間に欠けた身体性を思考によって

求めた結果が、型という文化であるという考え方はできないだろうか。本能的身体性とは即ち自然体である。本当の意味での自然体とは必要なことを必要なだけ行うというシンプルなものであるはずだ。そこに意識や自我というものが介在するが故、人間は観念的にしか自然体を求められない。そんな中で、命のやり取りの上になる武術というものに、本来の自然体を獲得したいという切実な思いがあったことは疑う余地もない。

ただ自我を捨てただけでは、人間としての身体能力に限界が訪れるのはあつという間のことであろう。また勘をどこまで研ぎ澄ましても、そこから得られる身体性は個人のものでしかない。自然から最も遠いところにあると思える文化的思考によって、自然体と同質のものを得ようという意識が、型を生み出したと言えるのではないだろうか。

無駄を一切なくした身体運用を獲得しようとするのは、野生の身体を取り戻そうとする行為である。人間が人間たる所以である思考を駆使して作り上げたのが型という文化であるが、そこに求められるのは意識や自我を捨てることであり、その結果として自らの感覚を高めて行くことで、更に高い次元の自然体を獲得する手掛りを得るのである。

意識により能動的に獲得する自然体。これが武術における型の存在を説明する言葉になりはしないだろうか。

今回一つのワークショップを経験することによって、本論のようなことを考えることができた。これもまた自然体を求める為の行いである。

以上